

紀行文に描かれた〈奈良〉

——田山花袋「奈良雨中記」とローデンバック『死都ブリュージュ』——

光* 石 亜由美

I はじめに

平成二四年度奈良大学研究助成の課題名は「紀行文に描かれた奈良——田山花袋を中心に」である。自然主義文学者として文学史に名前が挙げられている田山花袋は、紀行文作家としても多くの作品を残している。本研究は、田山花袋の紀行文作家としての足跡・業績を再検討するとともに、紀行文という観点から〈奈良〉というトピスをとらえ直す試みである。

田山花袋は、現在確認できるところ、その生涯で少なくとも八度、奈良を訪れている。

- ① 一八九八〔明治三一〕年三～四月 太田玉茗との月ヶ瀬旅行、志摩、紀伊をめぐり、奈良へ旅行
- ② 一九〇五〔明治三八〕年二月 『大日本地誌』の取材旅行で京都・大阪・奈良へ旅行

- ③ 一九一〇〔明治四三〕年三月 前田晁・窪田空穂・吉江孤雁と伊勢、月ヶ瀬、奈良の旅へ。
- ④ 一九一八〔大正七〕年十月 奈良・京都（香川景樹夫妻の墓）・大阪を廻る旅行

- ⑤ 一九二〇〔大正九〕年四～五月 妻里さをつれて、京都、大阪、三重、滋賀、兵庫、奈良、和歌山を旅行
- ⑥ 一九二一〔大正一〇〕年晩秋 奈良方面の旅行
- ⑦ 一九二二〔大正一一〕年秋 奈良方面の旅行
- ⑧ 一九二四〔大正一三〕年一月 鳥羽、名張、吉野、奈良への旅行

これまで、「紀行文作家・田山花袋——明治期、奈良への旅を中心に」（奈良大学紀要、三九号、二〇一一年三月）において、①②の旅行の経緯を明らかにした。本年度助成によって、③以降の旅程についても調査し、特に、③については、今年度の奈

良大学紀要に研究成果を発表する予定である。

本稿では、以上の研究で言及できなかった問題について、これまで明らかにしたことと、そして研究展望を示したい。

田山花袋の紀行文の中で描かれた〈奈良〉というトポスの表象を分析する際、しばしば、〈奈良〉とイメージを重ねられて登場するのが、「ブリュージュ」というベルギーの都市である。例えば、『日本一周』（博文館、一九二四〔大正三三〕四月）では、「奈良を思ふと、私はすぐ白耳義ベルギーのブルージを思ひ出す。それを舞台にしたロオデンバハを思ひ出す。ブルージ、ラ、モルトといふ小説を思ひ出す」とある。

「ブルージ、ラ、モルト」とは、ベルギーの詩人ローデンバックの書いた『死都ブリュージュ』という小説である。¹⁾以下、日本へのローデンバック、『死都ブリュージュ』の翻訳移入状況の概観、田山花袋のローデンバックへの興味、〈奈良〉に「ブリュージュ」のイメージを読み込む同時代の文学的想像力の広がりを確認してゆきたい。

Ⅱ ローデンバックの日本への移入

ジョルジュ・ローデンバック (Georges Rodenbach 一八五五～一九八年) はフランスで活躍したベルギーの小説家、詩人である。『死都ブリュージュ』は、一八九二年二月、「フィガロ」紙上に一〇回にわたりに連載されたのち、マルボン・フラマリオン社より刊行された。ブリュージュは、ベルギーの古都で、十四世紀にはフランドル地方の国際商

業都市として繁栄した都市である。

主人公ユーク・ヴィアーヌは、美しい妻に先立たれ、その苦しみに耐えかねブリュージュにやって来る。しかし、そこで死んだ妻にそっくりの踊り子ジャーヌ・スコットと出会う。奔放な彼女にもてあそばされるユーク。ついに、彼は妻に瓜二つのジャーヌを絞め殺してしまう。この物語に特徴的なのは、最愛の妻に瓜二つの女性を殺してしまう悲劇もさることながら、作者が「はしがき」で記しているように、ブリュージュという「都市」を登場人物としているところである。

この情熱研究の書において、ともかく私はとりわけ一つの「都市」を呼び起こしたと思う。人々の精神状態を結びあひ、忠告し、行為を思いとどまらせ、決心させる一人の主要人物のような「都市」を。

かくして、私が好んで選んだこのブリュージュは、現実のなかにはほとんど人間そのものとして姿を見せる……その影響力はそこに滞在する人々に及ぼされる。²⁾

そして、作者・ローデンバックは「ブリュージュの書割なまわりは事件のやま場に力のかすものであるから、したがってページのあいまには書割を挿入し、ぜひともそれを再現させなければならない」と、都市への想像力を喚起するために、刊本では数ページおきに、川岸、教会、聖堂、古い家屋などの網目写真三五枚を挿入する工夫をこらす。「本書

を読む人たちも、この「都市」の姿に魅せられ、その影響力を受け、
るようにするこの工夫は、『死都ブリュージュ』を小説でありながら、
ブリュージュ紀行のように読ませる効果を読者に与えている。

日本における文学者ローデンバックの移入研究については、村松定
史『日本におけるジオルジュ・ローデンバック』（芸林書房、一九九八〔平
成一〇〕年十二月）に詳しい。

まず、ローデンバックを最初に紹介したのは、上田敏であるという。
一八九五〔明治二八〕年一月の「帝国文学」でその名前を紹介し、そ
して、一九〇五〔明治三八〕年一〇月、雑誌「明星」に、「ジオルジュ・
ロオデンバック」の「黄昏」という詩を翻訳発表する。この詩は『海
潮音』に収められており、その序文において、ヴェルレーヌ、ヴェラ
ーレン、マラルメとともにローデンバックの名前を挙げたことが、日
本におけるローデンバックの移入史として重要であるとしている。

ローデンバック論の嚆矢としては、一九〇九〔明治四二〕年「早稲
田文学」の岡村千秋「詩人ローデンバック」であるが、小説の翻訳は
さらに遅くなる。

『Bruges la Morte』（死都ブリュージュ）の日本語訳は、一九三三〔昭
和八〕年の江間俊雄訳、ロオデンバック『死の都ブリュージュ』（春陽堂）
がもつとも早い。

『Bruges la Morte』の日本での翻訳は以下の通りである。³⁾

一九三三年 ロオデンバック『死の都ブリュージュ』江間俊雄訳

春陽堂

一九四九年 ロダンバック『死の都ブリュージュ』黒田憲治・多

田道太郎訳 思索社

一九七六年 G・ローデンバック『死都ブリュージュ』窪田般彌

訳 冥草舎

一九八四年 ジオルジュ・ロオデンバック『死都ブリュージュ・霧

の紡車』田辺保・倉智恒夫訳 国書刊行会

一九八八年 ロオデンバック『死都ブリュージュ』窪田般彌訳、

岩波文庫

二〇〇五年 ジオルジュ・ロオデンバック『ローデンバック集成』

高橋洋一訳、ちくま文庫

村松定史『日本におけるジオルジュ・ロオデンバック』には、田山
花袋の名前は見受けられないが、花袋の紀行文に「ジオルジュ・ロー
デンバック」「死都ブリュージュ」の名前が見えるのは、一九〇五〔明
治三八〕年九月である。詳しい経緯は後述するが、田山花袋は、上田
敏同様、比較的早くローデンバックに興味を持った文学者であると言
える。

Ⅲ 田山花袋とローデンバック『死都ブリュージュ』

現在まで確認できたなかで、田山花袋の文章で一番早く、「ジヨ

ルジュ・ローデンバック」 「死都ブルージュ」の名前が見えるのは、一九〇五〔明治三八〕年九月の「奈良雨中記」である。「奈良雨中記」の記述については後に詳しくみてゆくが、「伯耳義の若き詩人の群は今、欧州大陸に於ける詩の高調を歌へり。其一人、ジョルジ、ロオデンバハは、伯耳義の廃都ブルージュの詩人として声名ありき」とある。

ただ、一九〇八〔明治四一〕年三月二二日の読売新聞・日曜附録に掲載された「ローデンバックの「廃都」」において、「ジョージ、ローデンバツハ (Georges Rosenbach) は決して新しい作者ではないが、近頃読みたいと思つて居た矢先きに、蒲原(有明)君が Bruges la Morta (廃都) と云ふ小説を持つて居ると云ふ事で、早速借りて来て読んで見た」とある。田山花袋は、果たしていつ、『死都ブルージュ』を読んだのか。この三年間のずれに疑問をもった小林一郎は、「談話であるので記者の聞き違い、あるいは誇張も多少あつたのかもかもしれない」と『死都ブルージュ』を読んだ時期を一九〇五〔明治三八〕年か、その前年と推定している。⁴⁾ 田山花袋と蒲原有明は、後の龍土会の前身となる柳田國男邸での集まりで、一九〇二〔明治三五〕年には知り合つているので、「奈良雨中記」を書く前に蒲原有明から借りて読んだ可能性も捨てきれない。

しかし、一九〇五〔明治三八〕年の時点では、現物を読んでいない可能性もあるのではないか。つまり、現物はまだ読んでおらず、小説の概要をどこかで見聞きした可能性も検討してみる必要性がありそう

一つの仮説として、博文館の地理書の編集時代に、編集人の一人であつた山崎直方から知識を得た可能性がある。山崎直方は、東京帝国大学理科大学地質学科の卒業で、一八九八〔明治三一〕から一九〇二〔明治三五〕年の満三か年、地理学の研究を目的として、ドイツ・オーストリアに留学した経験をもつ。⁵⁾ 文学に造詣も深く、仕事の合間に「ドイツにいる時分、アルプスの山の中に、詩人ガングホウヘルを訪問した時の話」や「若い伯耳義詩人の群の故郷とも言つて好いブルウジェの故市の話」などを花袋に聞かせてくれたという。⁶⁾

上記の話をいつ聞いたかは定かではないが、話の文脈からすると田山花袋が博文館で地理書の編纂に従事した一九〇三〔明治三六〕年一月から、翌年の三月に日露戦争に従軍するまでの間であると推測される。

もう一つの仮説としては、海外の、とくに象徴派の動向を勉強する中で、ローデンバックの名前を知つたという可能性がある。

一九〇六〔明治三九〕年三月、「早稲田文学」に掲載した「小説に於ける象徴諸派」という文章の中で「ロオデンバハ」の名前を挙げてゐる。この号はイブセンが亡くなったことを受けた特集号で、島村抱月、柳田國男などが書いており、田山花袋の論は、マラルメ、メーテルリンク、イブセン、ハウプトマン、ソラ、モーパッサンらの多くのヨーロッパの詩人を紹介しながら、ヨーロッパの象徴派を概観するものである。ヨーロッパ文学の象徴派を何らかの形で勉強する中で、『死都ブルージュ』を知つた可能性も捨てきれない。

一九〇五（明治三八）年一〇月に、上田敏の『海潮音』の訳詞の「名訳」によってローデンバックの名は日本の文学愛好者の間に一気に広がり、熱狂的な愛読者を次々と生むこと⁽⁷⁾になったとすれば、田山花袋が同年九月に書いた紀行文「奈良雨中記」に「ジョルジュ・ローデンバック」「死都ブリュージュ」を挙げているのは、小説家ローデンバックの紹介としては、非常に早い例だと言える。

IV 田山花袋「奈良雨中記」における〈京都〉のイメージ

田山花袋「奈良雨中記」は、一九〇五（明治三八）年九月、「新古文林」に発表され、後に、『旅すがた』（隆文館、一九六四（明治三九）年六月）、『草枕・旅すがた』（隆文館、一九一四（大正三）年九月）、『花袋紀行文集 第二集』（博文館、一九二二（大正一）年一月）に収められた。「奈良雨中記」に描かれた一九〇五（明治三八）年二月の旅程については、拙論「紀行文作家・田山花袋——明治期、奈良への旅を中心に」（奈良大学紀要、三九号、二〇一一年三月）を参照していただくとして、以下、ローデンバックの『死都ブリュージュ』の出でくる唐招提寺でのくぐりを中心に見てゆきたい。

「奈良雨中記」は、『大日本地誌』（博文館）の巻四「近畿」の取材のための取材旅行をもとに書かれた紀行文である。一九〇五（明治三八）年二月二十六日、奈良に到着した花袋は、今小路にある旅館「対山楼」に宿泊する。「奈良雨中記」は、「処は奈良の古都、時は春初

風寒く、鼠色の雲は空に満ちて、昨日焼きしといふなる若草山の肩薄黒く、旅情の侘しさ転た堪へ難き折から、後の唐紙をそと開きて、婢は麦酒一陶を齎し来りぬ」と、この旅館の一室の描写からはじまる。

初春の細雨のなか、車に乗って三条大路を下り、「平城都の遺址」の側を通り、まず唐招提寺に向かう。裏門に車をつけた花袋は、「静かに其の松林、梢を渡る風の微かなる音」を聞くだけで、「わが心あやしうなりぬ」と、「千二百余年の殿堂」に足を踏み入れる期待感に心を躍らせる。

寺の庫裡に案内をこうと、一人の「跛足」の僧侶が現れる。僧侶の案内で金堂に入ると、「時の力の加はりたるが為か、仏の力のかくまわれを動かしたることは未だ嘗てあらざりき」と感嘆する。この世の欲望にとらわれ、功名に悶える自分と比べて、「この沈黙せる殿堂は、世にさる幾多の事変、幾多の悲劇ありたりとは夢にも知らぬも、如くに、独りさびしく今日に残りて立」つており、その寺の中でひっそりと生きる「跛足」の僧侶に「無限の崇高の情を無限の崇拜の念との潮のごとく簇り来るを禁め得ざりき」と感じ入る。

しかし、僧侶に「無限の崇高の情と無限の崇拜の念」を抱きながらも、世俗から抜け出しえない自己に「無限の悲涙」流す旅人・花袋の思考は、明治の唐招提寺から、一九世紀末のベルギーの詩人「ロオデンバハ」（ローデンバック）に突然流れてゆく。

伯耳義の若き詩人の群は、今、欧洲大陸に於ける詩の高調を歌

へり。其一人、ジョルジ、ロオデンバハは、伯耳義の廢都ブルグの詩人として声名ありき。其著『Buges la Mort』は形は小説なれど、想は全く詩なり。其廢都の古の香氣にあぐられたる一人の空想家は其主人公なり。渠、其愛妻を喪ひて、追慕哀憐の情に堪へず、世を捨てて功名を捨て、其の廢都の中に遁れしが、居常其亡妻を思ふの余、其空想は漸く誇張せられ、人間としての存在に一の異彩を具ふるに至れり。亡妻を追慕する空想家と千年余来の廢都のかをりと、何ぞその映対の妙なるや、何ぞその詩調の斬新にして象徴の美に富めるや。かくて渠はゆくりなく其廢都の市街に、其亡妻の面影を見たり。其髪、其顔、其姿、一つとして亡妻に髣髴たり。されど哀哉、そは其形のみにて其心は全く異なる若き女優なり。しかもその形に憧れし渠は、いかで其心を尋ぬるの暇を有すべきぞ。忽ちにして恋の深淵に投ぜられたり。されどその女優はこのあはれむべき空想家にかなる悲劇を與へたりしぞ。一度身を任せて、遂に彼女は渠に精神上の死を命ぜり。ロオデンバハの詩才は此の以後を叙するに於て、実の其の高調に達せり。曰く、精神上の死、これ何者ぞ。渠は此時より全く廢都の土の香と相伴ふことを得るに至りぬ、と。

われ、今、この物語をこの奈良の古都の一寺觀の裡に想ひ出しぬ。こは、余りに空想なりや。されどこは、事実なり、絶東の孤客に胸臆に響きし意味深き事実なり。

先に紹介した花袋のローデンバツク紹介文「ローデンバツクの「廢都」(明治四一年三月)においても、「廢都の其香、面白味を細君を失つた男と結びつけて遂に主人公其の人も此の町に来てから新しい女を持つて廢都の香と共に消滅して了ふと云ふ様な感情を書いたものだ」と主人公の運命と、「廢都」となったブリュージュの町を象徴的に重ねあわせている。花袋の「象徴派」への興味という点から、小林一郎は「時」とルインと「自然」、そして女・性慾。そうしたものが、無く廢都の中で消滅し、すべてが荒々しく、そして静かに変化して行く世界を象徴的に描いたその感情に注目しているのである」と、この唐招提寺、「跛足」の僧侶、そして、「死都ブリュージュ」への連想を説明する。

講堂の鴟尾を見て、「とはに過ぎ行きたる沈黙の影の象徴」と感嘆する花袋にとつて、唐招提寺、そして奈良のイメージとは、過ぎ行く時間を止めたかのように、時代の中で埋もれた「廢都」として、象徴的に賛美される対象である。

そして、『日本一周』(博文館、一九一四〔大正三〕四月)では、この「奈良雨中記」でのブリュージュ追想体験を再度引用している。

奈良を歩くと、私はその女(『死都ブリュージュ』に登場する女性・引用者註)を思ひ出した。落葉のガサ／＼するやうな細い道を歩きながら、その女のことを思つて、そしてふと気が附いて、自分で笑つたりすることがよくあつた。唐招提寺の松林の中でも

私はそれを思出したことがある。

奈良とブルージとを比較するのは或は間違つてゐるかもしれない。丸で感じが違つてゐる。かうその水彩画家も話した。そこに比べると、奈良の方は、同じ旧都でも、ぐツと明るいさうである。地形もぐツと開けてゐるといふことである。廃都といふ感じに於ては、ブルージの方が余程すぐれてゐるといふことである。しかし、日本では、旧都といふ心持を起させるのは奈良より他にはない。鎌倉などは駄目である。(略)つまり寺などが多くそのまゝに残つてゐるからである。皇居の址などが二千前を経ても依然としてたどれるからである。今と丸で趣を異にした寺の構造、その頃にそれほど日本が文明国であつたかと思はれるやうな大きな仏像、織巧に陥らなかつたその時の芸術——さういふことが一種の空気と一種の諧調とを私達の胸に齎らして来るのである。

この部分は次に、「普通に奈良に遊ぶ人」は、「大仏が大きいのがめづらしかつたり、春日神社の森にゐる鹿が珍しかつたりするに止つてゐるといふ苦言に続く。

おそらく、花袋にとつて〈奈良〉というトポスは、観光地の魅力以上に、ローデンバックの『死都ブリュージュ』に結びつくことによつて、魅力を増している。ブリュージュの町並みを想い描くとき、「新しいさびしい情緒など、いふことも其処から生まれて来る」(『日本一周』二八奈良)という花袋にとつて、〈奈良〉というトポスは、創作者と

して「新しいさびしい情緒」をかかえた主体を生み出す場所として意識されていたのは、次の「唐招提寺」(『京阪一日の行楽』、一九二三(大正一二)年二月)の一節からもうかがえる。⁹⁾

『(前略)ベルキイの作家に、ロオデンバハといふ人があるね?』
『ある、ある……』

『あの人の作に、『Bruges la mort』といふ作があるかね?』
『知つてゐる、知つてゐる。』

『あの作を思ひ出すやうなところだよ、『Nara la mort』を書く時には、何うしたつてあの寺を舞台にせずにはおけないね?』

こんな話を私はBとしたことを思ひ起した。

〈奈良—ブリュージュ〉の連想は、ここでは、新たな創作へのモチーフへと接続している。

田山花袋の作品には、しばしば次のように外国文学の主人公と、自己の悲哀を重ね合わせる人物描出法が見られる。以下は、田山花袋「蒲団」で、恋する女弟子に、新しい恋人が出来たことを知った「悲哀」の感情を表現する場面である。

一步の相違で運命の唯中に入ることが出来ずに、いつも圏外に立たせられた淋しい苦悶、その苦しい味をかれは常に味った。文学の側でもそうだ、社会の側でもそうだ。恋、恋、恋、今になつて

もこんな消極的な運命に漂わされているかと思うと、その身の意気地なしと運命のつたないことがひしひしと胸に迫った。ツルゲネーフのいわゆる Superfluous man だと思って、その主人公の儂い一生を胸に繰返した。(田山花袋「蒲団」、新小説、一九〇七〔明治四〇〕年九月)

「悲哀」「煩悶」「懊惱」「苦惱」という言葉をたびたび自己の運命を語るときに持ち出す花袋作品の男性主人公たちの、こうした情緒の形成は、同時代的には「センチメンタル」であると批難の対象でもあったが、同時にこうした感受性に感染する数多くの青年読者もいた。

このような「新しいさびしい情緒」をかかえた主体形成の、一つの源泉に紀行文体験があるとすれば、旅をすること、紀行文を書くことの意味をもう一度問い直さなければならぬ。特に田山花袋の場合は、小説家として名前が売れ始めても、小説活動と並行して、生涯紀行文を発表している。⁽¹⁰⁾ 旅好きだという理由だけではなく、紀行文で培われた感受性が、小説創作とつながるとすれば、あらためて紀行文と小説というジャンルの隣接性が問題になるだろう。⁽¹¹⁾ これは、今後の課題である。

V おわりに “Nara la Morte、——〈奈良〉への想像力

以上のように、古いものが減びてゆく悲哀という感情から、奈良と

ブルージュを結びつけるのは、田山花袋だけの感性かというところでもなかった。永井荷風も同じようにブルージュと奈良を結びつけて考えている。

村松定史によれば、一九〇七〜〇八〔明治四〇〜四一〕年のアメリカ、フランス滞在から帰国後から、荷風の書いたもののなかに、ローデンバックの記述がみられるという。⁽¹²⁾ ローデンバック文学を詳しく紹介した「文芸 読むがま、(二)」（三田文学、一九二二〔大正元〕年九月）では、『死都プリュージュ』を「廃市の鐘」と訳して、その解説をしたのちに、次のように記している。

▲われこの小説をよみし時、舞台を奈良の都に取り、古美術の空気を活躍せしめて、古代崇拜の詩人と、現代的な女性との恋の破綻を描かんにはと思ひ立ちたる事ありき。されどあまりに模倣の卑劣なる事を思ひて止みぬ。

この奈良版『死都プリュージュ』は、書かれなかったが、村松定史は、この着想は、一九〇九年に執筆された荷風の中編小説「すみだ川」⁽¹³⁾ に結実していることを、二作品の構成などの面から明らかにしている。

さらに、村松論で注目すべきなのは、奈良とブルージュを結びつける荷風の発想の原点を上田敏の奈良からの手紙に求めているところである。一九一〇年、奈良から上田敏は荷風に手紙を送り、その手紙の一節に「夢見の里とも申可きのNara la Morteにはかりよんの音ならぬ梵

鐘の声あはれに坐る古を思はせ候」とある⁽¹⁴⁾。これに対して村松論では以下のように推論している。

上田敏と荷風はパリをはじめ、京都、東京ですでに面識があり、荷風は五歳年長の上田敏を敬愛していた。そしてBruges-la-Morteをもじった「Nara la Morte」は、単に言葉遊びと言うだけでなく、日本の旧都奈良が敏にベルギーの古都ブリュージュを連想させ、その心象風景を荷風に書き送る裏には、明らかに小説Bruges-la-Morteが二人の共通のものとして介在しているように。

一九〇五（明治三八）年九月に田山花袋が「奈良雨中記」で、ローデンバック『死都ブリュージュ』に言及し、奈良からブリュージュに思いを⁽¹⁵⁾はせ、その五年後にも上田敏経由で、永井荷風が奈良―ブリュージュを重ね合わせる文章を残している。

「敏のこの一行が荷風に小説のアイデアを誕生させ」たのか、「すでに荷風には以前から摸作に近い作品の腹案があり、Bruges-la-Morteというタイトルや内容について二人の間で話題になっていた」かどうかはわからないという。さらに、田山花袋が『京阪一日の行楽』のなかで「Nara la Morte」という表現を使ったのは一九二二（大正一一）年であり、上田敏が永井荷風の手紙のなかで「Nara la Morte」と記したのは、一九一八（大正七）年以前である。

ローデンバックをめぐる、田山花袋と上田敏、田山花袋と永井荷

風のあいだに情報伝達があったかどうかは、現在のところ定かではないが、明治末年から、〈奈良―ブリュージュ〉幻想といったものが文壇の一部にあり、〈奈良―ブリュージュ〉イメージが創作の原動力となったのは確かであろう。

注

- (1) 作者の名前の記述は、「ロオデンバハ」「ロダンバック」「ロデンバック」「ローデンバック」「ローデンバック」と翻訳者によって一定しない。引用文を除く本文においては、一般に普及した岩波文庫版にならって「ローデンバック」とする。また、小説のタイトルの訳語も「廃都」「死都」「死の都」「ブルージュ」「ブリュージュ」と一定しないが、本文ではやはり岩波文庫版にならって「死都ブリュージュ」とする。
- (2) ローデンバック『死都ブリュージュ』（窪田般彌訳、岩波文庫、一九八八（昭和六三）年三月）より引用。以下、『死都ブリュージュ』からの引用は岩波文庫版による。
- (3) 松村定史「ベルギー小説の日本受容―ローデンバック『死都ブリュージュ』」、名城大学人文紀要、四二巻三号、二〇〇七年三月
- (4) 小林一郎「田山花袋研究―博文館時代（一）」、桜楓社、一九七八（昭和五三）年三月
- (5) 岡田俊裕「山崎直方・佐藤伝蔵編『大日本地誌』の地理学史的意義」、高知大学教育学部研究報告、六八号、二〇〇八（平成二〇）年三月
- (6) 田山花袋『東京の三十年』、博文館、一九〇七（大正六）年六月。引用は岩波文庫版（一九八一（昭和五六）年五月）による。また、いつの話であるか定かではないが、その山崎直方が「自分で、そこで撮ったのだ」と言つて、小さい写真を七八枚私に貸して呉れた」という回想もある。そのとき山崎はブリュージュのことを「ちよつと、撰津の堺と言つたやうなところせうね。堺に奈良の一部を加へたような感じのするところですね」と説明している。（『廃都』『赤い桃』、春陽堂、一九一八（大正七）年三月）。

- (7) 村松定史「ベルギー小説の日本受容——ローデンバック『死都ブルージュ』」、名城大学人文紀要、四二巻三号、二〇〇七（平成一九）年三月
- (8) 小林一郎『田山花袋研究 博文館時代（一）』、桜楓社、一九七八（昭和五三）年三月
- (9) 田山花袋『京阪一日の行楽』、博文館、一九二三（大正一二）年二月
- (10) 拙論「紀行文作家・田山花袋——明治期、奈良への旅を中心に」（奈良大学紀要、三九号、二〇一一年三月）の年表を参照のこと。
- (11) 花袋の紀行文研究としては、宮内俊介「初期田山花袋論 紀行文と小説の谷間」（文芸研究、三六号、一九七七（昭和五二）年三月）、持田叙子「紀行文の時代」と近代小説の生成——習作期の田山花袋を中心に」（國學院雑誌、八七巻七号、一九八六（昭和六二）年七月）、五井信「鉄道（日本）：描写——田山花袋の紀行文『草枕』をめぐる」（二松学舎大学論集、四三号、二〇〇〇（平成一二）年三月）などがあり、小説創作における紀行文の役割、近代化と紀行（文）の関係などが問われている。
- (12) 村松定史「ベルギー小説の日本受容——ローデンバック『死都ブルージュ』」、名城大学人文紀要、四二巻三号、二〇〇七（平成一九）年三月
- (13) 永井荷風「すみだ川」、新小説、一四巻二二号、一九〇九（明治四二）年二月。一九一一年三月『すみだ川』（初山書店）に所収。
- (14) 永井荷風「書かでもの記」四（「花月」六号、一九一八（大正七）年一〇月）に引用された上田敏の手紙から。
- (15) ただ、花袋において、〈奈良——ブルージュ〉幻想は絶対的なものではないようだ。古い都市が減びてゆく悲哀を感じる心性をローデンバックの『廃都ブルージュ』に託すのは、奈良だけではなく、「町に漂った衰残の空気が——それが不思議にも私の心をおる離れたアーチスチックな境に連れて行つた。ローデンバハのブルージュの町に於けるやうに、この衰えた町を歌ふ詩人が一人位あつても好いと思つた。」（「人生の一宿駅」、文章世界、一九一二（明治四五）年三月）のように、東京郊外の「小さいさびしい田舎町」にも適用されている。

**〈Nara〉 drawn on the travelogue Tayama Katai “Narautyuki”
and Georges Rodenbach “Bruges la Morte”**

Ayumi MITSUISHI

